

女・うらみ・文化 〈女の文化学〉スケッチ

川本隆史

●問題群としての〈女〉

まず、そもそもなぜ〈女〉をとりあげなければならぬのか、という点から考えてみたいと思います。今回のシンポジウムのテーマとして、「女性の文化」とか「文化における女性」とかも案としてあがったのですが、それでは〈文化〉というものを前提にして女性という対象について考えていく方向になってしまう。あくまで、女性を問うことが文化への問い直しにつながり、文化を問題化することと女性（および男性）の生き方が結びつかざるをえないような、問題構成にしたい、ということ、二つの単語を「と」で結びつけてみたわけです。つまり、「と」がはらむところの緊張関係に着目して、両者を単純に並列的に結びつけるのではなく、女性によって文化を文化によって女性を、全面的に問題化したい。実はこう考えたときに僕の念頭にあったのは、柳田国男の『女性と民間伝承』（一九

三二年、現在は『定本 柳田国男集』第八巻、筑摩書房、所収のものおよび角川文庫版がある）という書名でした。

和泉式部伝説を題材にしたこの刺激的な女性論は後にみることにして、柳田の著作のタイトルには常に一種の「仕掛け」がある——たとえば『桃太郎の誕生』は、主人公の異常誕生説話に注目させるものであるとともに、神話から昔話『桃太郎』が誕生してくるドラマチックな過程をも暗示しており、僕はそこでニーチェの『悲劇の誕生』を連想してしまいます——ことを考えてみますと、『女性と民間伝承』で使われている「と」もたんなる並列の働きにとどまりません。それは本論冒頭の次のような文章から明らかです。

私は別にこの人の伝記について、深い興味をもっているわけではない。ただ和泉式部というような、一人の中世の女性にも、その周囲をめぐってたくさんの、かつて顧みられなかった問題が残っており、じっと見ているとな

かなか大切な日本人の歴史が、その蔭に潜んでいるらしいということ、話してみたいのです。(角川文庫版一七頁)

女性は「たくさんのかつて顧みられなかった問題」を、らんだ存在としてあり、それをじっと凝視することにより「歴史」ないし「文化」の核心にふれることのできる「問題群」(「プロブレマティックス」)に他ならない。

もう一つ、「現象学的人間学」というアプローチをとるオランダのポイテンディックは、『女性——自然・現象・実存』(原著一九五一年、邦訳みすず書房、一九七七年)の第一章に「女性存在の問題性」を、ポ・ヴォワールの『第二の性』を含む従来の人間の性に関する考察がことごとく女性の特性への問いとして立てられていることを指摘しながら、それは女性が「われわれにとつてまずはじめの問題ある存在として現れる」からだと述べています。男性の現実の存在には問われるべき神秘はない。「しかし、女性の存在について考えるとき、はじめてひとはあらゆる生物とりわけ人間の性的分化の深奥に触れるのであり、それゆえにまた日常生活や科学のきわめて豊富な経験や陳述では理解できないものに触れるのである。」(邦訳三一頁)

また僕の守備範囲に近いところでいうと、去年のシンポジウムでも紹介した哲学者中村雄二郎さんが、バリ島の民間芸能パロン劇の登場人物、魔女ランダを手がかりに「演

劇的知」という新しい知のあり方を構想なさっています(『魔女ランダ考』岩波書店、一九八三年)。その本に収められた「原理としての〈子供〉から〈女性〉へ」という論文の中で、彼は身近であるがゆえに捉えにくい「深層の間」——先ほどのポイテンディックの「人間の性的分化の深奥」という表現が思い出されます——として、〈子供〉と並んで〈女性〉をあげています。近代社会はもっぱら健康な成年男性だけを基準にしており、その結果従来の学問は「おんな・こども」の排除の上にならたつていた。ところが近代の社会や文化が危機にさしかかっている現在、学問や文化のあり方を根本から考えなおそうとするとき「問題群」として追ってくるのが、長いあいだ男 \parallel 大人という表層におおいかくされていたこの二つの存在であるわけです。そして何より重要なことは、私たちの前に〈女性〉という存在が、そこから〈文化学〉を多様に展開していける一つの可能性を秘めた、トポス——共通の議論の場(「フォーラム」)——として出現しているという事態です。女子大生を前にして文化学を講じ、女子大生とともに文化学を研究するというのが、私たちの共通の立脚点なのですから。

●方法としての〈女性〉のうちみ

中村さんによれば、男と女への世界の原初的分割は易学

での陰陽二元論をみてわかるように優れてコスモロジカルなもので、その背後には神話学的な意味での性の未分化な世界、〈両性具有〉の世界がある（プラトンの『饗宴』参照）。私たちは文化の中でたまたま一方の性を演じていますけれども、他方の性を全く排除したのではなく、自己のうちの他者として潜在化させて含みこんでいると考えられます（フロイト、ユングの「深層心理学」参照）。こうした視点から中村さんはヨーロッパの思想史を再検討し、現代の性をめぐる様々な論議を手際よく整理なさっています、ここではこれ以上立ち入りません。せっかくのシンポジウム（＝饗宴）でありませし、話はずむような話題を提供したいので、次に「女のうらみ」という問題を考えてみたいと思います。

手がかりにしたいのは、河合隼雄氏がユング心理学の立場から『古事記』を分析した「日本人のころ」（NHK教育テレビ、市民大学講座、一九八三年四月九月）の中で、次のような指摘です。火の神を生んで死亡したイザナミを訪ねて黄泉の国へ下った夫イザナギが、妻が課した「見るな禁」を犯したための妻の怒りを買ひ、黄泉比良坂（かみか）までやっとの思いで逃げのびる。そこで二人が対峙し、女子イザナミはその怒りの表現として「一日に千人殺す」といい、男子イザナギは「一日に千五百人生む」と答えて、破滅を免れようとする。ここで男女の葛藤に対する一種の妥協

が成立し、それを通してこの世界が創り出されたことになるとは、この根底には「見られた」女の「うらみ」が横たわっている。このテーマは、トヨタマヒメの出産を禁を破って見てしまったホオリノミコトの話として『古事記』に再び現われており、民間芸能（能の「黒塚」や歌舞伎「娘道成寺」）や民話（「うぐいすの里」など）にもひきつがれている。女が課した「見るな禁」を男が破るけれども、最後には禁を犯された女の方が「うらみ」を残しつつ去っていく、というパターンは日本文化独特のものであって、この「女のうらみ」こそが日本文化の表通り（＝表層）に存在する「あわれの美学」を深層から裏打ちするものだ、と河合氏は主張しています。もちろん男の違約に対する「女のうらみ」は簡単に消え去るものではなく、日本文学史で「うらみの系譜」として間歇的に表現される一方、たとえば現在大きな問題になっている中高年の離婚（その大半が女の方から申し出られたものです）にも「女のうらみ」の噴出が見てとれる。

河合さんはこうして日本文化の深層にある「女のうらみ」を取り出すわけですが、この「うらみ」をさらに文化を見直す方法として鍛え上げたい、というのが僕の着眼です。それを理論的に展開する前に、「女のうらみ」と「学問」とのかかわりについての一つのエピソードを紹介しておきたいと思います。新カント派と現象学を摂取しながら独自

の「包弁証法」(絶対に無なる愛によって弁証法を包み越える)の立場を打ち出した高橋里美(一八八六—一九六四年)のもとに弟子が集って「愛の議論」を行っていた最中、彼の奥さんが現われ「主人は愛の哲学というけれど、ちっとも愛じゃない、私などちっとも愛されてはいません」と吐いて、一同ドツときたというものです(石津照璽「高橋先生の愛情」、『理想』一九六四年八月号)。これは単なる哲学者の妻の愚痴ではない。そのことばの深層を探ることが「愛」を中軸とした高橋哲学そのものの基盤を掘り崩してしまう、といった「うらみ」のことばとしてあるのではないか。確かに夫婦の日常生活と学者の学究生活とは関係ないんだ、という理屈もありますが、その立場にとどまる限り「うらみ」はたえずネガティブなものとして切り捨てられ、それを方法としてとりいれることはできない。こうした生活と知を二分する論理は男のものでしかないのであって、それこそが今問われているのではないかと思えます。

さて御存知のように「うらみ」の語源は、「ウラ(心の奥)ミル(見る)」です。ニーチェのルサンチマン論をひくまでもなく、「うらみ」はたんなる消極的な感情ではなく、むしろそれを方法として自覚的に使うことで「文化のウラ(＝深層)」まで見透しうる視座となるものです。つまり河合氏の「女のうらみ」を軸にした日本文化論と、ニーチェの「ルサンチマン」による近代文化批判とをつないで

考えたい。女という存在が文化の中でつねにもたざるをえない「うらみ」、これを切り捨てるのではなく方法＝武器として身につけることによって、いま私たちがその中でしか生きられない「文化」の「深層からの見直し」(＝ウラミ)——メルロ＝ポンティのことばを借りれば「徹底的反省」——が可能となるのではないか。

●女のうらみで文化を見直す

こうした作業の実例、ドキュメントとして思いあたるのが、スイスの精神医学者セシュエー夫人の『分裂病少女の手記』(原著一九五〇年、邦訳みすず書房、一九五五年)です。夫人は「象徴的実現」という精神療法を用いて少女ルネを分裂病から回復させたのですが、その過程をルネ自身が回想的に描いた手記は、まさしく「文化」というものが「うらみ」をもって見直すところのように現われてくるのかを強烈に印象づけてくれます。「非現実感」として出現したルネの「うらみ」はまず「学校」にむけられており、そこでは「もはや学校はそれと認めることができなくなり、兵營のように大きくなって、歌を歌っている子供達は囚人で、歌うことを強制されているように思われました」と書かれています。学校での遊び時間のナワ跳びにおいても、ルネはパートナーの女の子のからだがふくれ上がるの

を感じます。「学校の建物は巨大で滑らかな非現実となり、名状し難い苦痛が私をおさえつける」ように感じ始めたルネにとって、文化の中で感じさせられた「うらみ」は「ぎらぎら」「びかびか」「つるつる」といった感覚的なことばで表現される一方、文化そのものは彼女を処罰しようとする「組織」としてイメージされます。ルネの「うらみ」は直接には乳児期の口唇欲求が満たされなかったことによるのであって、セシユエはそれを「シンボルを媒介にして満たす(象徴的実現)」ことを通じてルネの心の病い≡非現実感の治癒をはかりました。けれども治療の現場にいない私たちは、ルネが病いの中にあつて「うらみ」をもって見据えていた「文化」(特殊的には「学校」、「家庭」、「病院」……)の現われ方に注目しなければならぬと思います。少女ルネの「うらみ」——それはイザナミのうらみにも通底しているはず——を「方法」として自覚的に用いながら「文化」総体を見なおしたい。

コミックの世界で、こうした「文化のうらみ」を敢行してくれた作品に、大西克洋『童夢』(双葉社、一九八三年)があります。そこでは、老人と少女が現代都市文化のシンボル≡高層団地を舞台とした、壮絶な戦い——都市をあくまでおごそかに破壊していく両者の死闘の根底には「文化へのうらみ」があります——をくりひろげているのです。また、うらみ(怨念)が女性の視点からする文化論にとつ

て決定的に重要であり、それが従来の男による女性論、文化論では完全に欠落していたことについては、鶴見和子さんの指摘があります(神島二郎・北沢洋子・小林直樹・鶴見和子「座談会 社会・文化と女性」、『ジュリスト増刊 総合特集』第三号「現代の女性——状況と展望」、有斐閣、一九七六年所収)。

以下では、社会化の媒介様式として「労働」と「相互行為」をあげるフランクフルト学派のハーバマスの文化論『イデオロギーとしての技術と科学』原著一九六八年、邦訳伊國屋書店、一九七〇年)に、文化的営為の基底をなす「身体」を加えた、三つの視点——「労働」「コミュニケーション」「からだ」——から、文化を見なおしていきたいと思えます。もとより網羅的な文化論にはなりませんが、「女」という問題群に「うらみ」を自覚的≡方法的に用いつつ迫っていく際に、この三つが突破口になると考えられるからです。

●労働のうらみ——イリイチのシャドウ・ワーク論をめぐって

現代産業社会を支える「学校」「医療」「交通」の三つの制度が、自ら「学び」「癒し」「歩く」自律的能力をマヒさせていることへの鋭い批判をなげかけているイバン・イリ

イチは、産業化の進展とともにたんなる無払い労働になつてしまつた「シャドウ・ワーク」の典型として、女性の家事労働をあげています。アナール派の社会史研究や経済人類学者カール・ポランニーの業績を手がかりにして、イリイチがいうのは次のようなことです。産業化される以前の社会つまり市場が生活にとって周縁的なものでしかなかつた社会では、全ての具体的な活動は男または女の役割として示されており、男女は「具体的な暮らしの場（サブシスタンス）」で違う仕事を分担しながら対等かつ相補的に働いてきた。その男女の相補性（コムプリメンタリテイ）の根底にあるのが、他の生物にはないヒト独自のもので、固有な暮らしに根ざした（ヴァアナキュラー）男と女の文化のちがいが、すなわち「ジェンダー」の区別です。ところが一九世紀以降の資本主義の勃興と産業化にもなつてジェンダーの別による男女の共働は崩れてゆき、「賃労働」という男女のジェンダーには無関係の中性的な労働様式が成立する。それと同時に、主婦の家事労働は夫の賃労働をかげで支えるだけのただ働きのしごと、市場での消費にのみむけられた影法師の労働、つまり「シャドウ・ワーク」に変質してしまつた、というのです。ここでは生活に根ざした男女の性差（ジェンダー）は失われてしまい、産業的に編成された性別（セックス）だけが幅をきかすようになる（ジェンダーからのセックスの「離床」）。

イリイチは、そこで卵料理の例をひきながら、料理という女のいとなみが「サブシスタンスでの仕事」から「シャドウ・ワーク」へと変わつてしまつたことを「うらみ」をもつてとらえかえています。前産業化社会においては、裏庭の鶏小屋から生みたての卵をとつてきて、女自らが起こした火の上で、ナベなどの道具を用いて卵料理をしていく。そこでは料理も生活や自然と有機的に結びついた、生き生きとした営みであつたわけです。しかし産業化された現代において主婦は、卵を買うために自動車を使って何キロか走り、スーパーマーケットでカゴをとりパックされた卵を探してレジで金を払い、帰つてきてからガスレンジのコックをひねる、という過程をへねばならない。便利になつていゝるようでは実は労働としてはかえつて複雑化しており、鶏との共生関係も見えなくなり、男女どちらのセックスでもできる活動へと卵料理が変質している。もう一つの指摘として——産業化される以前の社会における「干し草」づくりでは、草を刈り集め運搬し貯蔵する作業はちょうどバレエで男と女がそれぞれの役を演ずるように進められていた。それに対して現代では、トラクターが導入され雇われさえすれば性別にかかわりなく誰にもできるユニセックス的作業になつてしまつた、と。

こうして女性の「家事労働」は、男性の「賃労働」を補完するシャドウ・ワークになつてしまつたから、女性がそ

のワークをつらく、つまらなく感じる——賃労働者≠男性の立場からは、これだけ合理化されて楽になっているのに文句をいうな、という類いの非難がくり返しなされますが——のは、当然であって、それは家族、鶏、自分の道具とが織りなすコスモロジカルな世界の全体像が見失われてきたからに他ならない。女性がシャドウ・ワークの中で感じさせられている「うらみ」、それでもって現代の労働・経済のあり方そのものが問いかえされることになるのです。

(ちなみに、通勤に必要以上のエネルギーを費している私たち、賃労働者になるための学校教育を強制されている子どもたちもまたシャドウ・ワークを担わされているのです。) さらに私たちは、シャドウ・ワーク(下部経済)の領域での家事労働だけでなく、経済学が対象とする「記録されたエコノミー」での女性の低賃金、インフォーマルな「記録されないエコノミー」での売春を労働における「女のうらみ」としてとり上げざるをえない。そのどれもが、男≠賃労働者を表層の主人公とする現代の「文化」の深層からの見直し(＝うらみ)を強いるものです。「イリイチについては、入門的なものとしてイリイチ・フォーラム編『人類の希望』(新評論、一九八一年——とくに「Ⅱ 男と女の文化」、本格的なものとしてイリイチ『シャドウ・ワーク』(岩波現代選書、一九八二年)、山本哲士編『経済セックスとジェンダー』(新評論、一九八三年——とくにイリ

イチ「バナキュラー・ジェンダー」、研究書として山本哲士『消費のメタファー』(冬樹社、一九八三年)をあげておきます。)

● コミュニケーションのうらみ——「妹の力」の復権をめざして

次に「コミュニケーション」という文化領域を「女のうらみ」で見直してみましよう。中世史家網野善彦氏と文化人類学者川田順造氏とによる興味深い対談「歴史と空間の中の「人間」(全国大学生生活協同組合連合会発行『読書のいずみ』通巻一六号、一九八三年)の中に、日本の中世社会とサバンナの社会に共通する「女の領域」として「歌」と「市」の二つがあったという指摘があります。その二つの場では、男性上位の秩序が解体され、女性が生き生きと歌い、語り、伝えあう主体コミュニケイトとなっていたわけですが、現代のコミュニケーション体系において女性は自らのことばを商品化することはあっても、自律的なコミュニケーション回路をもてなくなっている。再びイリイチをひくなら、かつてはジェンダー特有の現実把握の違いは、男女の知覚、仕ぐさばかりでなく両者の話しことば(パロール)の相違となっってはつきりと表わされていたのに、産業社会のライフスタイルの中では新しいユニセックス的なコミュニケーション

シヨンの媒介が発達し、女の話しことばにも男の形式が浸透してしまつた、ということなのです（イリイチ「バナキユラー・ジェンダー」前掲）。このことは、網野氏のいわゆる「女性の世界的敗北」の一環をなすものですけれども、この敗北をネガティブに見るのでなく、そのうらみを通じて、「女性の性そのものの非権力的な特質、『自由』と『平和』との深い結びつき」をこそ徹底的に認識すべきです（網野「女性の無縁性」、同『無縁・公界・楽』平凡社、一九七八年所収）。

そこで必要となるのは、柳田国男のいう「妹の力」の復権です。その序にこうあります。

われわれの「妹の力」が、改めて痛切に要望せられる時代はきていたのである。この一巻の書が証明せんとしているごとく、過去の精神文化のあらゆる面にわたつて、日本の女性は実によく働いている。あるいは無意識にであつたかも知れぬが、時あつて指導をさしている。これが一朝專業化の傾向を示してきたために、その特色は家庭の外に追いやられて、次第に軽しめられる者の列に入つてしまひ、一度も試みられたことのない可能性が、今はまだ多くの柔らかなる胸のうちに睡っているかと思われる。『妹の力』一九四〇年、角川文庫版七頁）

柳田が「妹の力」として考へたのは、一言でいえばコミニケーションにおける「媒介者」（メディアエイター）の

役割のことだと思われれます。古代においてカミとヒトとを媒介する「巫」の仕事はことごとく女性の管轄であつたと『妹の力』。自らの生存のために諸国を遍歴し歌物語を語りひろめながら常民文化を創出していった「遊行女婦」（うかれめ）「歌比立尼」たち（||無縁を生きる女たち）こそが、日本各地に伝わる「和泉式部伝説」の担い手であつたこと。さらに芸術の主管者は本来女であつたこと『女性と民間伝承』前掲。またカミとヒト、ヒトとヒトのコミニケーションにおける重要なメディアウム（媒介）である「酒」に関しても、かつてはその製造と管理は女の專業であつたこと——醸すという語はもと少女が穀類を噛んで発酵させる行為をいい、現在は男の專業となつた「杜氏」も刀自||主婦の転じたもの（同書）。以上のことからしても、宗教・芸術を中心とする文化の中でかつての女性は大いなる力（妹の力）をもつて人間を結びつけており、歴史の表層に現われた政治や戦争の事業にも隠れて参加した女性の力は実は大きかつたのです。（ものと女性との交換を親族構造の根底においたレヴィ||ストロースの理論も、二つの集団の紐帯・媒介者としての女性の意義を強調したものととして『妹の力』につなげて読むことが可能でしょう。）ところが現在女性はセックスと育児、家事を中心としたシャドウ・ワークを負わされておひ、かつてのようなコミニケーションの主体たりえなくなつてゐる。そこに蓄積されて

いる「女のうらみ」を活性化することは、現代のコミュニケーションのあり方を根本から問い直す重要な糸口になるものと思えます。

●からだのうらみ——女のケガレと男の脆さ

最後に女性のからだの問題について簡単にふれてみたいと思います。民俗学者の瀬川清子さんが長年のテーマをまとめられた労作『女の民俗誌』（東京書籍、一九八〇年）の副題に「そのけがれと神秘」とありますように、一九世紀末まではほとんど日本全国にわたって出産・月事の際の女に別屋・別食を強いる風習（忌屋籠り）がありました。こうした文化現象をたんに血に対するタブーや神道の「触穢」思想から説明するのではなく、文化人類学者の波平恵美子さんによる「ハレ・ケ・ケガレ」の三極対置の問題提起（『通過儀礼におけるハレとケガレの觀念の分析』、『民族学研究』第四〇巻四号、一九七六年、他）などをふまえながら、「うらみ」をもって見直してみると次のようなことがいえそうです。

出産や月経というのは直接的に生殖能力を表現するものですが、まさしくその能力を男はもっていない。けれども文化の継承のためには、表向きは男性優位の父系社会であっても女性の力をかりなければなりません。しかも手近の

女性に対してはインセスト・タブーが強力に働いているわけですから、文化の中の男からすると女はコントロールできそうで実は完全には統御しきれない、という矛盾した側面を示します。そうした女性の矛盾性——山口昌男氏のいう「存在論的他者」性——が一種のエネルギーを発散することになるので、男の文化はそれに「ケガレ」というレッテルをはってその力を封じこめようとしてきた。つまり、ケガレ——その語源が「氣枯れ」か「褻離れ」かといった問題はさておき——を清浄性に対する不浄性といったネガティブな位相で考えないで、周りに非常に強い影響力を及ぼさざるをえない、危険ではあるが強いエネルギーのポテンシャルを保っている状態としてポジティブにとらえなおしてみたいのです。

このことはまた生物学の方からも裏づけられます。性科学者マナーとタッカーの『性の署名——問い直される男と女の意味』（原著一九七五年、邦訳人文書院、一九七九年）によれば、生物学的にいうと女性の方が基本的存在で、発生のいくつかの臨界期に男性方向への効果的な推進力（男性ホルモンなど）が働きかけないかぎり、胎児は女性方向に進むのだそうです。この男への推進力を彼らは「アダム原則」と呼びますが、これこそ生物としての男性の不安定さ、脆さを示すものではないか。たとえば、受精時にはおよそ一四〇対一〇〇で男性の比率の方がかなり高いのに、

出生時には（流産等で淘汰された結果）男一〇五に女一〇〇との差が縮まります。最初にひいたヨモツヒラサカでのイザナギ、イザナミの対決、男が女よりも五〇〇人多く産むという神話が思っておこされますが、いずれにせよ数の上で多く生まれないと男は「エネルギー」の点で負けてしまう。実際、平均寿命で考えても、文化の中でしぶとく長生きするのは女性の方であって、こうした点からも男性の生物としての脆さが見えてくる。この脆さを文化の表層に出さない「仕掛け」の一つとして、女性Ⅱケガレ思想が通文化的に機能していたのではないのでしょうか。

文化大革命の中国で出会った女たちとの対話に基づいて、一神教Ⅱ父権的Ⅱ資本主義的文化の解体を展望した記号論学者クリステヴァの画期的女性論『中国の女たち』（原著一九七五年、邦訳せりか書房、一九八一年）の中に、懐妊の状態における女性こそ深層の生の体现者だという主張があります。懐妊は、日々の社会化された時間性、月々の循環性から女性を解放し、ノーマルな「人間的」時間と対立する「宇宙的」な時間の感覚に近づけてくれます。このとき「女性は表層、つまり、皮膚・眼といったものから身を引き離し、からだの深層に降下し、細胞の極小の生に耳を傾け、味わい、感じる」のだと。同じようなことを作家の森崎和江さんが、谷川俊太郎氏との対談の中で述べていらっしやいます（谷川『やさしさを教えてほしい』朝日出

版社、一九八一年）。森崎さんは妊娠したときそれまで自然に使っていた「わたし」という言葉が使えなくなった。

「そんな言葉なんか置き去りにして、私の心も身体も、お腹のなかでことごとく生きているのちを受けとめ愛してるんです。……単独者としての『わたし』が消えて、ほかのいのちと一緒にあって、私は違った色になっているんですね」。そこで彼女はデカルトの「我思う。故に我あり」を本気になって読みなおしたそうですが、学生の頃いくらかわかったような気がしていたデカルトのコギトに対して全然イメーシがまとまらない。

妊娠——個なる「わたし」が死んで違うわたしが生まれてくるという体験、ジエネップⅡターナーのいう「リミナリティ（境界状態）」においては、コギトも明晰・判明な哲学の原理とはならない。自己のからだの中に他者のいのちを、さらにいのちの連帯性をも感じるというコスモロジカルな感覚は、男でしかない僕は逆立ちしても体験できないものですが、そうであればこそその感覚をケガレに結びつけて自分から排除するのではなく、コギトにしがみついている近代哲学ののりこえのための重要な原理として、何とか共通感覚（コモン・センス）にまで鍛えあげたいと思うのです。マリノフスキーらによって報告されている、「擬胎分娩（クウヴァード）」という象徴的儀礼、すなわち妻の分娩中に男がそれを模倣する儀礼は、妊娠・出産の感

覚を男女で共通（コモン）にもとうとする知恵の一つにちがひありません。そうした知恵を哲学——ソクラテスにあってそれは出産の現場に立会う知、産婆術としてイメージされてきました——は再びわがものとすべきです。「女のからだのうらみ」、それは、近代哲学ばかりか近代の文化総体を見なおすための、強力なエネルギーを秘めた磁場トポスなのではないでしょうか。

最後にもう一度柳田国男をひいて結びたいと思います。はじめにこだわった『女性と民間伝承』というタイトルは、かつては女性が民間伝承の創始者・伝播者であったとする指摘と、現在では女性が民俗文化の保存者・研究者として積極的に活躍すべきだというアピールとの「両義性」を合意するものと思えますが、その序言の末尾に次のような箇所があります。

正しく人生と国の本質とを理解しようとする者は、単に冷淡であつてはならぬのみならず、進んでその隠れた奥を窺うことが必要ですが、感覚の鋭敏でまた暖かい同情を持ち得る人でないと、この方面の観察には適しないのです。故に何よりも先に、聰明なる女性に、この事業の興味を覚らしめるのが順序であります。（角川文庫版一五頁）

僕が試みたかったのは、ここでいう「人生と国」を「文

化」として、「その隠れた奥を窺うこと」を「うらみ」として——ついでにいえば「聰明なる女性」を「文化学科の学生・卒業生」として——読みかえることだったのです。以上で報告を終わります。〈女の文化学〉のスケッチとしてもまだまだ不備なことは承知で、たとえばこころの深層からの男と女のとらえかえしに關してはユングの「アニメ・アニメス」論にもふれたのですが、これは今後の課題とさせていただきます。

《付記》 本稿は、跡見学園女子大学文化学会の第二回シンポジウム「女性と文化」（一九八三年九月二九日、新宿、九龍会議室）の基調報告をもとに、シンポジウムでの討議とその後の研究をとりいれて再構成したものである。シンポジウム当日不十分であったイリイチ理解に關しては、その後『経済セックスとジェンダー』合評会（〈プラグを抜く〉編集委員会主催、一〇月一日、早稻田率仕園セミナーハウス）での山本哲士氏の明快な報告や高良留美子さんによる鋭いイリイチ批判から大いに啓発をうけた。ここで山本氏や後援の新評論の方々に感謝するとともに、同社より「シリーズ・プラグを抜く3」として青木やよひ編『フェミニズムの宇宙』が刊行された（一九八三・一月）ことを付言しておこう。〈プラグを抜く〉の上掲二冊は、掲載論文および巻末の文献表ともども〈女の文化学〉のための貴重な貢献である。会員の方々の参照を推めたい。また「うらみ」を対象概念としてでなく方法概念として使うという着想については、駒井義昭氏の「実存とうら

み」(東洋大学文学部紀要 哲学科編『白山哲学』一二号、一九七八年)から示唆をうけた。謝意を表したい。

また〈女の文化学〉に関連する学会として一九七七年発足の「日本女性学研究会」があり、『女性学年報』と月刊の『Voice of Women』の発行を軸に、関西を中心として広範な人々を組織している(問い合わせは、〒661尼崎市北郵便局私書箱33号、または川本まで)。東京にはお茶の水女子大学内に「女性文化資料館」が開設されており、内外の資料を収集・整理している。さらに注目すべき洋雑誌に『Signs: Journal of Women in Culture and Society』(1975—)(本学図書館でも継続購読中)がある。

本稿は、一九八三年度の高橋産業経済研究財団の研究助成費による研究成果の一部である。

(かわもと たかし・専任・文化学原論)

— 25 ページよりつづく —

漢人社会における陰陽観念からすれば、陽—男性—童乩(タンキイ)—神霊という系列に対して、陰—女性—乩嬢(アンイイ)*—死者霊という系列が対応しているのであり、したがってその社会における尼の存在も社会的・宗教的全体像の中で考察されるべきものなだろう。

*注 アンイイは女性職能者。主として関亡あるいは関落陰といわれる死霊を馮依させる。

(うえまつ あかし・専任・民俗学)